

エッセイ集

わかるということ

□「わかるということ」についてエッセイを書くこと、というお題が課された時に「わかると理解することは違うのだぞ！」という高校の数学教師の言葉がすぐ頭に浮かんだ。ここで先生が言いたいのは、先生が言った直後に問題を解くことができても、テストで解答することができなくては意味がないということだ。つまり、その場しのぎの「わかる」ではいけないということを言いたいのだ。しかし「わかる」は本当に「理解する」とは違うのだろうか。私は「わかる」と「理解する」は同じ意味合いでとらえたい。「わかる」という言葉を「理解した」と思ったときにはじめて使いたいと思った。簡単に「わかった」というのではなく、例えばインターネットや本で調べてわかったという位に、ことの本質をとらえてはじめて「わかる」という言葉を使い、適度な「わかる」「わかった」というような知識を減らしていきたいと思った。

「わかる」について考えていくうちに「わかる」という言葉はたったの三文字であるが、意味深い言葉なのだと思い始めた。そして、「わかる」に「理解する」という意味合いがあるように「わかる」には他にも違う意味合いがあるのではないかと考えた。私は友達から悩みを相談されて、友達の境遇や思いに対し「それわかる」や「言いたいことよくわかる」という言葉を使うことがよくある。この時の「わかる」は、先ほど話したような、友達の境遇を「理解する」という意味合いも含まれているが、友達の境遇や考えを「分かち合う」という意味合いが強いと思う。人の気持ちや立場を「わかる」には、数学の問題を解くように「理解する」だけでなく、相手や皆と意見や気持ちを「分かち合う」ことが必要になると考えた。

まだまだ経済の知識や常識のない私は、ゼミを通して今まで知らなかったものや事柄に直面する機会がこれから多くあると思う。曖昧な知識を増やすのではなく、ことの本質をとらえ、あらゆるものをきちんと「わかる」ようになりたい。また、ゼミでは、年齢、性別、生まれた土地も違う様々な人がいる。ひとつの課題に対しても、皆異なる観点でものごとを捉えるので、いろいろな考え、意見が飛び交うと思う。異なる意見を持つ相手のことを「わかる」のは大変だと思うが、相手ときちんと向き合い「分かち合っていく」ことが大切だと思う。そのことによって、一人では今まで見えてこなかったことが見えてきたり、新しい視点、観点を身につけることができるようになると思う。また、社会に出てから柔軟に世の中を渡っていけるようになると思う。「分かち合う」という言葉は『広辞苑』では、「分け合う。一つのを分割して取得または負担する。」と説明されている。また、広辞苑の例文として、「喜びを分かち合う」という素敵な言葉があった。一つの課題をみんなで協力し合って達成した後、みなで「喜びを分かち合う」ことができたらいと思った。

□真夜中の病院に、一人の男が入ってくる。真っ先に少女が横になっている個室へ向かう。男がしなければならぬのは、彼女の命をつなぐ人口呼吸器を止めることである。彼女に優しくキスをして語りかける。反応は出来ないが彼女は涙を流し、男は静かに立ち去った。映画”MILLION DOLLAR BABY”のワンシーン、互いに“わかりあった”二人の静かなやりとりが印象的でした。

さて、このエッセイのテーマについて考えていきたいと思えます。“わかる”とは文章をつくることです。“わかる”ということは言葉と連動しています。文章をつくることで人はそれを判断し、区別するのです。それが“わかる”ということ。漢字で表すならば「解る」でしょう。しかし課題は「解る」でも「判る」でもなく、「わかる」です。だとすればこの言葉に何か特別な意味をもたせることが出来るのではないかと、そう考えました。

ふと、帰りの駅で風の通る冷たい通路に横たわっている人を見かけて、立ちすくむことがあります。忙しく行き交う人混みの中で、私はどうしていいのかわからなくなりました。彼にもきっと家族がいるし、人とわかりあう瞬間をたくさん味わったと思うのです。けれど今この瞬間彼の周りにはたくさんの人がいるのに、誰にもわかってもらえないのかもしれないかもしれません。抱きしめてあげたいと思うのに、私にはそれが出来ませんでした。

赤の他人をわかってあげるといのは簡単なことではありません。それでも彼を見た人がいたなら、きっと何かを感じていたと思うのです。温かさと冷たさの間で人は生きてかなくてはなりません。一人でぬるま湯につかっていられたら、どんなに楽だろうと思うけれど、きっとそんなのはあり得ないと思います。だからこそ、自分以外の人がいることが重要性をもってくるし、お互いを支えあっていく必要があります。自分のことをわかってくれる人がいるというのは大切なことです。どんなに辛くてもわかってきている人がいるということだけで諦めずに頑張れたりするものです。

誰でも孤独を感じてしまったり、寂しくてやる気をなくしてしまいがちですが、気がつかないだけだったりします。先輩が最後のレクチャーで、自分を見ていてくれる人がいることに気づいて嬉しかったと言っていました。相手の存在に気づき、互いにわかりあった時、充実感が味わえます。家族や学校、部活動やバイトを通して多くの出会いを経験し、私はわかりあえた瞬間をたくさん感じてきたし、現在進行中です。とても幸せな環境です。

私が考えた「わかる」というのは頭ではなく、自分の中のどこかに存在する“心”で感じるものでした。漢字を当てはめるなら「感（わかる）」でしょうか。先生の出した課題の意図に沿ったものではない気がしますが、考えたことを書いてみました。「わかるということ」は簡単ではないけれど、必要なこと、「わかるということ」は気づけないことに気づくこと、私はそう思います。

■「わかるということ」をエッセイにして書くという課題を出された時、今まで書いてきたエッセイの中でテーマが一番曖昧でとても難しいという印象を持った。そこで私は「わかるということ」とは一体どういう意味なのか考えることから始めてみた。「わかる」を辞書で調べてみると、『(1)意味や区別などがはっきりする。理解する。了解する。(2)事実などがはっきりする。判明する。(3)物わかりがよく、人情・世情に通じる。(4)一つ一つのものが別々になる。わかれる。』という意味が出た。しかし、これでも「わかるということ」をどうやって書けばいいのかうまく思いつかない。そこで、わかることによって何が違うのかを考察してみた。

わかることによって、何が違うのか。2つの点から考察してみた。1つ目はわかることによって、「次の行動に移せること」。2つ目は「時間を有効活用できる」というこの2点を導き出した。では、最初に考えたのがわかることによって、「次の行動に移せるということ」ということから考察していきたい。私はわからないと行動に決して移すことなど出来ないと思っている。例えば、ゼミが何時からあるかわかっていないとゼミに参加することはできない。DVDを見たくても機械の使い方がわからないと次の行動である見ることに辿り着けない。普段何気なく、意識しないで行動しているがわかるということはとても重要なことだ。わかることによって次の一步を地球上の人間や動物は踏み出してしているのだ。

次に考えたのが、わかることによって時間が短縮されるということである。わかることによって、何か行動したり考えたりすることは、わからないで行動したり考えたりするよりずっと時間の短縮になる。人間わかっていないと闇雲に行動するだけで、それは限られた時間を有効に使えないと思う。有効に時間を使うにはわかっていないといけないと考えた。これも例を挙げるならば、小さい頃から何気なく四則計算をしているからこそ瞬時に計算して生活に役立てたりしているのだ。ただ、私たちは関数や方程式、歴史のように人から教えられて、わかることもあれば人から教えられなくてもわかることがたくさんある。それは赤ちゃんの時から耳・目・鼻・口・手足を使って聞き取ったり、感じ取ったりしてわかっていくのだ。

このように考察してみて普段何気なくわかって行動しているが、もしこの世がわからないで行動したりする世界になるとどうなるかと思うとぞっとする。きっと理性などない闇雲に行動する世界になってしまうのだろうか。そんなことを考えてこのエッセイを終えたいと思う。

□「分かるということ」。それは、最初に「理解するということ」と定義したい。そして、その「分かるということ」(＝「理解するということ」)は、2段階に分けて説明できるのではないかと考える。

私が、これから「分かるということ」について述べさせて頂くが、その前提には、自分の生活する身の回りには、誰かの意見であったり、メディアが発する事件やニュースであったりを受け入れられる環境があるということ、まず初めに覚えておいて頂きたい。それらは、私が「分かるということ」を語る際に、必ずなくてはならない対象物であるのだ。

先程、私が考える「分かるということ」は、2段階に分けて説明できると述べさせて頂いたが、その第1段階として、「自分の意見を持つ」ということを挙げたい。なぜ、第1段階に「自分の意見を持つ」ということを挙げたかという、直接他人の考えやメディアを通じてニュース等を聞いた際に、ただ聞いただけでは、それら物事の本質を理解できていない(＝「分かっていない」)のと同じことであると思うが、それらを聞いて

て、それらに対して「自分の意見を持つ」ことができたということは、物事の本質を理解できた（＝「分かった」）故の行動だと私は考えるからである。確かに、テレビ・新聞等のメディアを通じて得た事件やニュースについて「分かるということ」を述べる際には、この第1段階のみで説明できるのだが、直に他人の意見を聞いた際に限っては、第1段階であるただ「自分の意見を持つ」ことだけが、「分かるということ」（＝「理解する」）には繋がらないのである。

そこで、私が考える「分かるということ」の第2段階は、第1段階で持った自分の意見を「相手に伝える」ということである。例えば、学生であればゼミや授業、社会人であれば仕事場や会議等で、自分ではない他の誰かの意見や考えを聞いた際に、それに対して第1段階である「自分の意見を持つこと」ができたとしても、それを話し手である相手に伝えなければ、その話し手からすると、自分が発した意見等を聞き手は理解していない（＝「分かっていない」）のではないだろうかと思ってしまう。だが、聞き手である自分が意見を持ち、その意見を「相手に伝える」ことで、話し手も聞き手が理解してくれている（＝「分かっている」）と感じ取ることができるのである。

以上が、私の考える「分かるということ」である。抽象的になってしまうが、我々が普通の「人間」である以上（学者や研究者等でない以上）、この「分かるということ」について真剣に考える機会を、正直あまりないと思う。しかしながら、今日、このような機会を与えられたことで、「分かるということ」と真剣に向き合うことができた。私が上で述べたことは、常にこれからしなければいけない自分の目標でもあると思うので、初めは意識しながら取り組んでいき、いつかは意識せずに行動に表すことができる日が訪れることを願っている。

■はじめに、“わかる”を完全理解としたとき、「人間にとって“わかる”ということ不可能である。」これは私が“わかる”ということについて考えた結果に出た結論です。

人は、“わかったつもり”になら簡単になります。“わかったつもり”というのは、“ある事柄に関して一部分だけ知る”ということであり、それは、ある事柄について知るための土台でしかないのです。人はその事柄について“わかる”ことは決してできないのです。自分で設定した条件に対して充足したとき、人は“わかった”と感じます。しかしこれは、あくまで自分自身のなかで“わかった”のであって、本当にその事柄について分かったわけではないのです。たとえば、数学の問題で（ $1 + 1 = 2$ ）という方程式についてわかろうとした時、誰もがこんな問題簡単だと声を上げるでしょう。しかし、数学のテストのくくりを超え、「 $1 + 1 = 2$ 」の方程式を考えたのは誰か」と問いを変えてみるとほとんどの人は（ $1 + 1 = 2$ ）の方程式について知らないこととなります。つまり、数学に限らずどの問題でも人は一部の答えしか知らない（＝わかっているわけではない）のです。また、“わかる”ということは相対的なものです。それぞれの人にそれぞれ考えがあり、感じ方も違います。「自分が“わかりたい”のだから他人の考え・意見は関係ない」と思う人もいるでしょう。それも一つの考えであるですが、それはあくまで自分の設定した条件であって、“わかる”とは違うのです。人は自己からは永久に抜け出すことはできません。したがって、自分以外の人の感じていることを知ることはできないのです。これは前文と矛盾しているように聞こえると思いますが、人が相対的なものについて知ることは不可能なのです。

しかし、人は、“わかる”ことに近づくことならできます。“わかる”に近づくためには、まずは、自分自身で知りたい事柄について最大限に調べ、理解する必要があります。そして、その事柄について他の人と話をして、意見を聞くことです。人の意見を聞くことは、自分とは違った考えを聞くことであり、視野を広げるきっかけになるのです。ひとつの事柄に対して、一面的な見方ではなく、多面的な見方をすることによって、より深く知ることができます。なぜなら、“わかる”は相対的なものなので、ある事柄について人はそれぞれの考えがあり、全く同じ考えを持つということはあり得ないのです。それゆえ、違った視点の意見を聞くことによって、新たな考えが生まれるのです。これを繰り返すこと（これを経験と呼ぶのだと思います。）によってひとは“わかる”にかぎりなく近づくことができます。

最後に、冒頭で私は“わかることは不可能だ”と豪語しましたが、“わかる”に近づくことなら誰にもできるのです。しかし、“わかる”に近づくためには、多大な労力と努力が必要です。頑張って何かを“わかろう”とすること、つまり、自分から進んで経験をつむことは立派な人間になるための必須条件なのだと思います。

□普段、何気なく使っている「わかる」という言葉・・・私は、今回このエッセイを書くまで、この言葉の意味について、特に考えたことはありませんでした。まず、国語辞典で「わかる」という言葉を引いてみました。辞書には、「分かる」、「解る」、「判る」というように、三つの使い方が載っています。それぞれの使い方は、最初の「分かる」は「事情が分かる」、「話が分かる」といった場合に使われ、二つ目の「解る」は「英語が解る」、「意

味が解る」、また、三つ目の「判る」は「善悪が判る」、「違いが判る」といった場合に使われるそうです。「わかる」というこの言葉の意味は非常に深いと思いました。

「わかるとは一体どういうことなのだろうか？」と考えたとき、それはとても難しい問題のように感じました。そして、よく学校の先生が言っていたことを思い出しました。それは、「勉強はわかれば楽しいものである」という言葉です。私は、本当にこの言葉の通りだと思います。わからなければ前に進むことは決して出来ないし、「わかった」ときに感じる嬉しさ、楽しさは、何事にも代えがたいもののように感じます。私は、「わかろう」とすることが勉強なのではないかと思いました。そして、何事も「わかる」ということから始まるのではないかと思いました。わかったから終わりなのではなく、そこから、考え、行動し、理解を深める、このことが非常に重要なことなのではないでしょうか。数学の場合がそうであると思います。計算問題の公式、やり方がわかっていたとしても、そこから、自分で考え、応用しなければ、問題を解くことは出来ません。「わかる」、この過程を経て生み出されるものは、本当に大きなものだと思います。

私は、このエッセイを書いている、人間というものは、常に「わかりたい」、「理解したい」という意志を持って生きているのではないかと思いました。だからこそ、私たち人間は、様々なものを生み出し、現在あるこの社会までに、発展させてきたのだと思います。もし、人間が「わかりたい」、この意志を持たなくなってしまうたら、どうなってしまおうだろうか……。考えると、とても恐ろしく思いました。しかし、このようなことを考えさせてしまう現状が、今の日本にはあると思っただけでいいのです。それは、私が進級論文や共同論文の中で触れた日本の教育の現状、つまり、子供たちの学力低下のことです。広く知られているように、日本の子供たちは他国の子供たちと比べて、勉強することへの意欲・関心が非常に低いという状況です。「わかりたい」、「理解したい」と思わず、「わかろう」とする努力をしない、このことがこの問題の根本にあると、私は思います。わからなければ、勉強を楽しいと思うことは決してないし、わかろうとしなければ、考えることすらもなくなってしまわないのでしょうか。私には、わかることよりはるかに、わからないことのほうが、多くあります。私はこれからも、常に、「知りたい」、「わかりたい」という感情を持って生きていきたいと、強く思いました。

□アルバイトを始めて、今年の12月でちょうど2年になる。2年前の入ったばかりの頃はバイト中、ただ、ただ時間が過ぎるのを待っていた。その時の私は「早く終われ、早く終われ」、「辞めたい」と密かに心のなかで思いながら、仕事をしてきた。ろくに接客もレジもできず、人と関わらない皿洗いに逃げていた情けない自分を今でもはっきりと覚えている。私は与えられた、言われた仕事だけをやってきた。それは、何をすればいいのかわからず、何をすべきなのかわからなかったからだ。今思えば、自分から何か積極的に動こうという考えは全くなかった気がする。正直、ただお金が欲しいから、仕方なく働いていた気がする。

そんな、どこか虚しい日々を過ごしていたある日、同い年で仕事をテキパキこなし、楽しそうに働いている子が目についた。その子は、本当にしっかりしていて、私の中でとても輝いて見えた。その子の姿を見て、私のように嫌々、働いていていいのだろうか。果たして、このままでいいのだろうかと思うようになった。そして、自分から動かなきゃ、何も変わらないと思い始めるようになった。そう思い始めてから、私は働くことに対して前向きになっていった気がする。やはり、お客様の笑顔や「ありがとう」の一言は嬉しい。それを直接感じるができる接客の仕事の楽しさも、実際に働いて経験してみなくては知ることができなかったと思う。また、「わからない」から何もしないのではなく、「わかる」まで誰かに聞けばいいし、「わかる」ように自分で努力しなければならないことも学んだ。2年間働いてきた今では、やるべきことがわかるようになり、自分が上の立場になることで、やらなくてはならないこと、言わなくてはならないことが増えた。それはそのぶんだけ責任が増えたことを意味するが、「わかる」ことでアルバイトに対する楽しさが増えたことも事実である。

「好きこそ物の上手なれ」ということばがあるように、好きになることで何倍も、何倍も、やる気や上達の速さが違ってくる。嫌々やるよりも、好きになったほうが絶対、得なことは確かだ。今まで、私のアルバイトについてみてきたが、ゼミ活動でも同じようなことが言えるのではないだろうか。1年前の私は、ゼミが何を勉強する場所で、何をやらなくてはいけないのか、全くわからなかった。実際に1年間の経験を通してゼミで何をやるのか、1年前よりはわかっているぶん、辛さや責任など負うものも増していくのかもしれないが、そのぶん楽しさや喜びが増すのではないかと考えている。これからのゼミ活動に期待しつつ、自分の「わかる」ことを増やしていきたい。

経験を通して、自分で吸収した「わかる」ことは、自分のモノとして活かしていくことができる。「わかる」ことで、今まで見えてこなかった多くのことを見て、感じて、学ぶことができる。何もかも、始める前から自分の限界を自分で決めてしまうのでは、何も「わからない」。自分の可能性を信じてやってみなくては、何も「わかる」はずがない。それならば、私は「わかる」まで何度も挑戦していきたい。

■わかるということは、思い込みである。わかるという言葉は頻繁に聞かれる。例えば、敗北から学ぶことがある、とよく耳にする。それはこんなことである。負けてしまったけれども、やりきること、全力で挑むことが大事であり、結果は二の次である。それよりも、この悔しさを他に生かせばいい、次に生かせばいい。とてもポジティブで理想的な考え方である。が、このように考える人ばかりではない。ある人はこう考える。負けてしまった。今までやってきたことはなんだったのだ。やはり自分には無理だったのだ。どうせ負けるなら、努力などしなればよかった、とこんな感じである。

両者が試合に負けてわかったことは、正反対である。なぜ、わかることが違うのか。それは、その人の性格や考え方が大きく関係するからである。ただ、この考えというものは、人との出会いなどの経験により、年を重ねるごとにいくらかでも変わっていくものである。今回、ポジティブに考えることができた人でも、同じように負ける日々が続けばさすがに、努力は無駄であるという結論に行き着くだろう。このように、わかると言うことは、ころころと変わりうるものである。今、こういうことなのだな、とわかったことでも時間が経てば、その認識が全てではない事に気づく。わかることは絶えず変化するのである。同じ経験からでも、人によりわかることは違う。つまりわかったと思ったことは、一時の思い込みなのである。わかったことが正しいか正しくないかに限らず、人は経験から何かを学ぶ。そして、その時わかった何かは、生きていく上で姿を変えて人の考え方を変えていく。わかるとはそんなものではないだろうか。

私もこれまで生きてきた中で、様々なことをわかってきたつもりである。様々な経験が私の考え方を変えてきた。でも今までの経験で学んだことが全て正しいのだろうか。間違いなく全てではないだろう。わかるには二種類存在するのではないだろうか。前向きな考えを出来るようにするものと、後ろ向きな考え方をさせるようなもの。前者は、人が行動を起こすさへの糧となり、プラスの影響を及ぼしてくれる。対して後者は、私の行動を制限しマイナスの影響を及ぼす鎖である。わかったことが正しいとは限らない。しかし、人は経験から学んだ事を信じ込みやすい。もちろん経験から学んだことであるから、それなりに根拠もある考え方になる。しかし、その考えが全てではないことを忘れてはいけない。わかったことがすべてではない。考え方は、縛りつけてはいけない。しかし、人は年を重ね様々なことを経験すると共に、考え方をどうしても縛ってしまう。現実を知ると多くの場面で、現実的な考え方しか持たなくなっていく。

しかし、それでいいのだろうか。馬鹿で居続けろと言うのではない。自分らしい考え方があるのなら、それをなくさないことも大事なのではないかと言うことである。繰り返しになるが、わかるとは思い込みである。であるから人は、正しいかどうかに限らず、それが他人に害を与えない範囲で自分が好きなようにいくらでも思い込んでいけばいいのだ。

■私にとって「わかるということ」とはどういうことだろうと考えていると、二つのことが浮かんできた。一つ目は失ってからわかること、二つ目が今まで知らなかったことに対してわかってくると世界が広がるということ。それでは具体的にどういうことだろうか例を使って書いてみようと思う。

まず初めに失ってからわかるもの。これは何か大切なものや人など、失ってみてからはじめてわかることがたくさんある。何か大事なものを失った経験がある人にとっては思い当たることもあると思う。例えば、なぜいままでこんなことに気が付かなかったのだろうと後悔することもあれば、私は今までとても幸せに暮らしていたのだと思うこともある。私はこのとき「大切なものは目に見えないんだよ」という言葉を思い出した。その通りだとそのときに初めて思った。しかし目に見えないものを大切にするだけでなく、同時に目に見えるものも大事にするということに気づいた。どちらも大事なことで、両方のバランスが大切だと思っている。どちらかのバランスが悪いと前者と後者に依存してしまう可能性がある。人生のなかで衝撃的な出来事に遭わなければわからないこともたくさんあるが、あまり経験したくはないと思っている。

次に言葉や物事を知ることによって世界が広がると思う。例えば、違う言語を学ぶことによって自国の言語が違って見えてくることや、あるブランドのバックについて知っていれば、街を歩いているとやけにそのバックを持っている人がたくさんいることに気づく。今までそのことを知らなかった場合は特に気にもしなかったのにそれを知ったために気づいてしまう。そして自分の周りにもそういうものが溢れているのに気づく。また、自分の好きなことなどについても同じことが言える。上の例は知らないものに対してだが、好きなものを極めていくと今まで見えてこなかったことが次第にわかってくる。「わかるということ」は区別をすることとも言われているが、この区別する能力を高めれば、例えばソムリエのようにあるワインを飲んで、これは何年ものワインだというふうに当てることも可能になる。

つまり「わかるということ」は気づくことでもあり、知ることでもあると思う。日々の暮らしのなかでほんの些細なことがわかることによって見える世界、価値観みたいなものが変わって見えてくる。日々の暮らしが惰性になっているのはもったいないと思う。時間だけは平等に与えられているのだから、常に知りたい、

または瑞々しい感性を持ち続けたいと思っている。また「わかるということ」は考えることでもある。考えなければ「わかったということ」や、「わからない」という状態にはならない。人間は考えているからこそわかったと思える。人生は「わかるということ」つまり考えることの繰り返しだと思う。こういったことが意識的にまたは無意識的に行われているのだと思う。そうでなければ、本を読んだり、音楽を聞いたり、映画を見たりして、人はあんなにも影響を受けないだろう。

□「わかる」とは、その物事の意味を理解してさらに実行・または説明することができる。最初にこの課題のテーマを聞いた時にまず私なりに考えてみたことである。これでは意味が足りないと思い、まずは辞書で調べてみた。わかるという単語には、漢字が三つ当てはめられていた。「分かる」、「判る」、「解る」。判明する・判別する・理解する・了解する・明らかになる・・・、といったように大同小異ではあるが色々な意味がある。さらに「わかる」を英語に翻訳してみたら、九つの単語が近い意味として表示された。understand・see・appreciate・know・tell・find out・recognize・judge・turn out などである(他にもあるかもしれないけど)。英語の「わかる」という単語だけでこれだけ数があるというのがわかっただけでも面白い。私たちは色々な「わかる」を使い分けているのだ。

辞書で調べてみて思ったことは、色々な意味はあるけれど、「わかる」には大きくわけて二つ種類があるということだ。理論的に頭で「わかること」と、感情的に心で「わかること」の二つである。私が中学生の時、小学生だった妹に算数を教えてあげたことがあった。「この問題はこの式を使ってこうやるんだよ。」と一通りのやり方を教えると、妹は「わかった。」と答えた。そこで他の似たような問題をやらせてみると、妹は解くことができなかった。私は妹が「わかった」と言ったのに問題を解けなかったことに、何でわからないのだと少しイライラしていた。初めは解けなくてもしょうがないと「わかっている」のだけれど、腹が立ってしまった。頭と心の「わかること」の違いがここで起こっていたのだろう。自分の中にある知識を相手にわからせようとするのはとても難しいが、ここでしっかりと相手に教えることができないのは、自分自身もよくわかっていないのだろうか。

最初の一文で書いた“「わかる」とは、その物事の意味を理解してさらに実行・または説明することができる。”に矛盾している。しかし、自分はその問題を解くことができるのだ。理解していることだけが「わかる」という定義にはならないのかもしれない。でも、理解していないことでも「わかる」ことはできる。例えば、自分が全く知らない言語の外国人に話しかけられたとする。何を言われているのかなど、さっぱりわからないはずだ。けれども、相手の仕草や顔の表情などで相手が何を訴えてきているのかは何となくではあるが、わかる。頭でわかっていなくても心でわかってあげることができると思う。そしてその逆もある。以上のことから「わかる」ということには大きくわけて二つあるのだと思った。

しかし、人のことも物事も、全てを「わかる」ことは不可能だと思う。他人のことを全て理解できる人はいないだろうし、もちろん解けない問題もたくさんある。そこでいかに自分が「わかる」範囲で人と関係を築いていけるか、問題を自ら考えようとするかで、人生さえも変わってくると思う。自分が相手を納得させる形でわからせることができれば、自分もわかっていることになるだろう。自分から「わかろうとする」ことをやめてしまったら、その物事はずっと「わかる」ことはできない。そして、「わかる」という定義の範囲なんて人によって違うと思うので、そこを考えて人や物事のことを「わかる」必要もあると感じた。

最後に、自分の言いたいことを上手く表現できなくて文を書くことがとても難しい作業だということが、このエッセイを書いてみて、わかった。

□「わかる」という言葉を一言で説明するのは難しい。思考の面から「わかる」ということを考えれば、生き物の中で唯一思考能力があるとされている人間だけが「わかる」ということができる生き物なのかもしれない。しかし、生き物の中には人間以外にも、思考能力が無くても「わかる」ということができる生物は多く存在する。というより、全ての生き物は「わかる」ということができるのではないだろうか。なぜなら、どんな小さな虫でもエサがどれかは判別できるし、危険を察知することもできるからだ。たとえ人間のように思考能力がなくても、「わかる」ということはできているのである。

しかし、小さな生き物の「わかる」ということをエッセイに書いていても面白くないので、今回は人間の「わかる」ということを考えていきたいと思う。人間は、日々「わかる」ということを繰り返しながら成長し生きている。人は生まれてから死ぬまで、同じ日を経験することは二度とない。毎日変化のある生活の中で「わかる」ということが絶えず繰り返されているのである。その「わかる」ということを経験することによって、新たな発見や理解を深めていき、少なくとも前の日の自分、つまり過去の自分に比べると成長しているのである。それが、いい成長か悪い成長かはわからないが、過去の自分より現在の自分は確実に成長し

ているのだ。また、「わかる」という判断は自分自身にしかできないということも言える。「わかる」という言葉は主に自分のことにしか使わない。自分がわかったと思えば、「わかる」という言葉を使うが、いくら相手がわかっているようでも、他人が外見から見てわかっているという判断はできない。

相手がわかっているという動作や確認をした上で、初めて他人の「わかる」ということを判断でき、他人の「わかる」ということは本人以外は、決してわからないはずなのである。そして、「わかる」ということを考える時に、外国人とのコミュニケーションの場が思い浮かんだ。普段私たちが日常生活で使っている日本語で話している時は、何の問題も無くコミュニケーションをすることができるが、日本を出て海外に行ったときに、「わかる」ということは非常に重要になってくると思う。海外ではもちろん日本語は通じないし、コミュニケーションは主に英語で行われている。違う言語を使っている人同士がコミュニケーションを行う時に、「わかる」ということができなければ話にならない。相手が言っていることを理解することで初めて話が通じることができる。つまり、話すということも重要なのだが、「わかる」ということも同じくらいコミュニケーションでは重要な要素なのである。

このように考えてみると、「わかる」ということは、人間の成長の中でとても重要なものの一つだと言えるのではないだろうか。もちろん、食べ物や空気など生きていく上で欠かせないものは多数存在するが、精神面での成長は「わかる」ということが繰り返し行われることによって成り立っているのだ。つまり、人間から「わかる」ということが無くなった時、成長が止まったと同じことだと言える。

■わかるということを考えてとき、何をわかるのかと先ず考えてみた。公式や物事の道理がわかるのか、人についてわかるのか。公式や物事の道理をわかるというのは、「理解する」という意味だと思う。しかし人についてわかるというのは、何が重要なのか、また何と考えられるだろうか。人を公式や物事の道理のように100%わかることは決してないと思う。他人と自分では見てきたもの、感じてきたもの、経験してきたもの、考えとどれをとってみても全く同じものはない。そこで他人を理解することはなくとも、他人の考え、感覚、思いに「共感」することは出来る。人の考えなどに共感するということは、自分と他人を分けた上での行動だからだ。人をわかるということとは、「共感する」こと、他人と自分を分けた上でどこまで他人を考えられるか、近づけるかが重要だと考えた。

そこで他人の何が共感し易く、共感し難いのかと考えた・・・それは苦痛と幸福だと思う。何故苦痛がわかり易いのか、幸福がわかり難いのか。幸福というのは漠然としていて抽象的なものだと思う。何かに幸福を感じるとき、さまざまな感覚でそれを感じている。例えば、食事のとき幸福を感じたら、それは味覚、触感、腹の満たされた感覚、その場の雰囲気を感じたときのものだ。しかし苦痛を感じたとき、幸福よりももっと実体を伴った感覚で、他人にとってわかり易いものだ。指を切って痛みを感じたとき、それは指からの感覚だけであって、幸福のようにさまざまな感覚で捉えたものとは違う。しかもそれを他人がわかろうとしたとき、その痛みを経験していれば感情移入でき、分かち合う、または共感することができると思う。たとえば自分の目の前に、足を怪我した犬がいたとしら、憐れみや哀れさを感じ、自分が過去に感じた痛みを想起し、犬に手当てまでするだろう。人は他者が痛み、苦痛を受けていたら、共感しわかろうとするとすると思う。

ではこの目まぐるしく変わり続けている世界で生きている私たちは共感し合っているのだろうか？分かち合っているのだろうか？私はし合っていないと思う。先進国といわれる各国が幸福を求め続け、安定し続ければ、発展途上国といわれる国は苦痛を受け続ける。たとえば、チョコレートの原料であるカカオ豆は10歳にも満たない子供が作っている。教育を受けられず、何を作っているのかさえわからない子供が過酷な労働をしている。その子供たちが作ったチョコレートは裕福な者たちの口へと運ばれるが、彼らはその甘いものの裏をわかろうとも、考えようともしないのではないだろうか。

今私が食べているチョコレートでさえ、一生カカオ豆が何になるのか知らない子供が苦しみを伴って出来たものだ。それをわかろうとするか、わからないままでは全く違うと思う。もし世界中の人々が、他者の苦痛をわかろうとしたとき、共感出来たとき、貧困や格差が消えていくのではないかと私は思う。

□「わかる」というのは、どういうことであるのだろうか。辞書を引いてみると、四つの書き分けが出てくる。「分かる」、「解る」、「別る」、「判る」。通常、私たちが使う「わかる」は、前のふたつではないだろうか。では、「分かる」と「解る」の違いは何であろう。

私はよく、「わかるけれど、わからない」状態になることがある。それは、頭では理解しえるけれども、感覚としては感じられない場合と、感覚としてはわかるのだけれども、頭では理解できない場合とがあると思う。これが、「分かる」と「解る」の違いではないだろうか。「分かる」とときには、心ではわかっている。「解る」とときには、頭で理解している。(そう簡単に、心と頭とを分離して考えていいものなのか、疑問ではある

のだが・・・)つまり、完全に「わかる」という状態になったときには、頭でも心でも「わかって」いる状態になっているということではないだろうか。

高校時代に、その「わかる」という状態になったことがある。校則で禁止されているバッグがあった。生徒のほとんどがその校則違反のバッグを使用していた。一種のブランドと化していたのだ。私もそれが欲しかった。校則で禁止されていると「解って」はいたが、それを持ちたいという気持ちはなくならなかった。しばらくして、校則で禁止されている理由を知ることになった。しばらくして、そのバッグを使うことが格好悪く見えてしまった。「分かる」と「解る」とによって、「わかる」ということができたからだ。「わかる」ということは、インプットされたものを自分なりに処理して、それをまたアウトプットできる状態にまでしたのではないだろうか。

私は時々、誰も自分のことをわかってくれないと思うことがある(わかってほしいと思うことは、少し、傲慢なことなのかもしれないが・・・)。今まで、私が他人に対して、「わかってくれた」と思ったのは、私を感じていることをことばにしてくれ、私が言ったことばに付け加え、または他のことばで表現してくれたときであると思う。しかし、よくよく考えてみれば、それは相手が私の心の中を読み取って「わかった」のでもなければ、私になりかわって、私の感じていることを私として、感じているというものでもない。相手の経験則に従って、こういう状況だから、こういう心理状態に陥っている。したがって、こういうことを考え、感じているに違いないというものでしかない。つまり、「自分なりの処理」を加えたアウトプットをしたに過ぎないのだ。私を感じていることを言い当てることができたとしても、私のことを完全に「わかった」とことは少し違う。誰かに理解してもらおうことができたとしても、結局は、「他者」のなかでの「私」として、理解されたに過ぎない。しかし、私たちは、「わかる」ということができる。私たちは、完全に「他者」になることはできないのかもしれない。でも、「私」のなかには、確かに「他者」が存在し、おそらく、「他者」のなかにも「私」は存在している。

□“分かるということ”について考えてみたとき、最初に思ったことは“分かる”というたった一言の日本語の中には様々な意味が含まれているということであった。和英辞書で“分かる”と引いてみると、understand, see, get, appreciate, comprehend, know, tell, find, turn out, recognize…というようにどの場面において、どのようなニュアンスで使うのかによってそれぞれ単語が存在し、使い分けられているのだ。しかし、日本語の場合“分かった・分かる”という言葉は、理解したとき、了解したとき、判明したときなど様々な場面によく使われるため、一日一回は必ず聴く言葉と言っても過言ではないときえ感じる。私には、様々な意味合いを持つ“分かるということ”について、全てを包括して考えることは難しく、できないため、今回このエッセイでは“分かる”イコール“理解する”と解釈し書いていきたいと思う。

しかし、いざ書き始めようとする、何を、どうしたら、どういう状況・状態が“分かる”ということになるのだろうかという疑問が浮かんだ。普段何気なく“分かった”という言葉を使っているが、深く考えてみると、なかなか難しいものである。そこで、身近な自分のことを考えてみようと思う。最近、両親と意見の食い違いが多く、よく喧嘩をするようになった。本当に些細なことなのだが、親の言っていること、注意していることの本質が見えずに、目先のこと(自分の要求)ばかりに気をとられてしまうのだ。私は、もっと長い目で物事を見なさいとよく言われる。確かに、目先の自分の要求しか見えておらず、親の意見や助言の表面だけを見て、表面だけで全てを判断してしまっているのかもしれない。そのために素直に親の言っていることを受け入れられないし、反発し、口答えをし、喧嘩になってしまうのであろう。しかし、喧嘩というのは、親の意見に納得ゆかず、自分の要求を聞いてほしいという思いの現れでもあると思う。

この場合における“分かるということ”イコール“理解する”ということはどういうことなのだろうか。この場合における“分かるということ”は、両親がどのような意図で、どのような考えの下に意見や助言をしているのか、について、少しでも自分なりに考え、相手が口に出さないところまで、どこまで汲み取ることができようか、ということだと思う。自分の要求を一方的に押し付けるのではなく、また親の意見を一方的に受け入れるのでもない、お互いが聞く体制を整えることができる、そして、喧嘩という形で相手に反抗することのない状況・状態—納得している、になって初めて本当に親の意見・助言を“分かった”イコール“理解した”といえるのではないだろうか。

“理解する”ということとは、相手が口に出さない、物事の見えない部分まで、少しでも考えた上で、相手が口にしていない、物事の目に見えている部分を受け入れ、自分はそれを受けて、どうすべきか、判断することなのではないかと思う。

□世の中、私にはまだまだわからないことばかりだ。“わかっている”と思っていることだって、本当は“わか

っていない”のかもしれない。このエッセイを書き始めようとして気付いたのだが、“わかる”ということがどういうことなのか、考えたことも無くてわからなかった。だが、だからといって、考えたら“わかる”のか。考えて、考えて考え抜いて、「わかった!!」と思っても、本当にわかったと言えるのだろうか。なんだかよくわからなくなってきた。本当に“わかる”ためには、体験しなければ、身をもって感じなければわからないのではないかと思う。働くことの厳しさも、人付き合いの大変さも、いろんな楽しさも、実際に体験して初めて、わかるだろう。

高校生のときに担任の教師がよく言っていた、「今が大事だぞ、今やらないと後悔するぞ」という言葉も、高校を卒業してずいぶん経った今になって、あの時頑張っておけばよかったという後悔とともによみがえってきて、それこそよくわかる。1人暮らしの寂しさや大変さ、それに対する実家のよさだって、上京前にいところから散々聞かされて、「わかったよー」と思ったり、どうしてそんなに実家通いを推すのかわからずにいたが、実際に1人暮らしを始めて、もうあつという間に一年が経とうとしている今日この頃、1人暮らしのよさもいっぱい感じているが、寂しいなと思う事もしばしばあるし、家事だって大変だし、上京したがっている年下の子に実家通いを勧めたくなる気持ちがよくわかる。また、富士急ハイランドのFUJIYAMAも、怖い怖いと聞いていたし、怖いということを知った上で乗っただけで、実際に高さ70メートルぐらいのところまで座席がカンカンカンカン上っていき、富士山が近くに見えた落下の瞬間には「ああ、私これで死んだな。」と思って乗ったことを後悔した。ジェットコースターの怖さを全然わかっていなかった。これも実際に乗ってみてはじめてわかった事である。

それから、人の気持ちは、自分以外のものはわからないと思う。「わかーるわかるよ君の気持ちー♪」なんて、小池徹平がCMで歌っているのを聞いたことがあるが、人の気持ちなんて結局のところ本人にしかわからないと私は思う。人のことを“わかった”と思ったり、“わかってもらえた”と思うことも、突き詰めて考えていくとよくわからない。ほんの一部をかすめとっているだけの気がする。心や気持ちは複雑だから、本人にしかわからないものだと思う。ここでいう“わかる”の程度は行き過ぎているかもしれないけれど、わかっていると思っても、人は人のことを全部はわからないと思う。だからこそ面白いのだし、わからないところを受け入れたり、かみくだいていくことが必要なのだと思う。そういう意味では、人と人とはわかりあえると思う。

最後に、わかるということは簡単でないと思う。わかった、と思ったことも、そこで満足しないで、本当にわかったのか？と問い詰めていく姿勢が重要なのではないか。

■ナゾナゾをしているときでも、勉強をしているときでも、はたまた日常生活の中でさえも、「分かった!!」というときのパワーはとてつもない。そういったときのパワーはものすごい力で自分のやる気をアップしてくれる。自分の場合、最も「分かった!!パワー」によって助けられたのは、受験勉強をしていたときである。なんせ、高校生活二年間、勉強というものから死に物狂いで逃れ続けてきた自分は、受験勉強が始まったとたん廃人と化していた。

はじめは勉強が全く分からず学校の授業は眠気との戦いであった。ところが、少しずつやっけていくうちに本当に少しずつ勉強が分かるようになってきた。「なるほど!こういうことか!」と授業で思うことが多くなってきたのだ。そのとき、自分の「分かった!!パワー」が炸裂したのだ。もっとたくさんすることについて知りたく、もっとたくさんすることについて学びたくなった。それからというもの、自分の中で勉強というものが苦ではなくなった。信じられないくらいに勉強に意欲的になったのだ。

しかし、この「分かった!!」という境地に達する以前に「分かれようとしなさい」ということもある。あきらめてしまうのだ。「わかるということ」は達したときはとても充実感がある、しかしそれだけに多くがそこまでにあきらめてしまうのだ。一度でいいから頑張ってみる。それが「わかるということ」の道筋なのではないだろうかと思ふ。だが、はたして「分かった」というところで終わってしまっているのだろうか?例えばニュースで経済に関する話が話されていたとする。自分が分からず、分かるために情報を得て、ニュースで何のことを言っていたのかが分かるようになったとする。そこで果たして「ああ、よかった。すっきりした。」で終わっているのだろうか。「分かった」ということを終着点にして満足し、そこで終わらせてしまうのではなく、その先にある自分の考えを作ってみる、「分かった」ということを一種の通過点や媒体のようなものとみて考えてみる。これは、今までの勉強などとは違い、もっと別次元のことだと思う。勉強は「分かった」らそこでお終いだ、そのさらに先があるのではないだろうか。経済のニュースを見て自分なりの考えを出し、そして自分なりに打開策や、自分ならこうするな、というようなことを考えてみたりする事が本当にニュースを分かったことになるのではないか。

自分もしかしたら「わかるということ」の先が一番重要なんじゃないかと思う。佐藤ゼミのオリエンテーションで配られていた紙にも書いてあった、「何でも考えてみる」このことが「分かるということ」の先にある一番重要なことなのではないか。逆にいえば、自分の考えを出すときにはまず、その事柄に関してよく

理解することからはじまるのではないだろうか。ニュースにしても勉強にしてもそれを分かり、その後何
を自分は思い、どう動いていくのかが「分かるということ」の一番大切な部分なのではないだろうかと思
う。

□「わかるということ」。それは『思考の飛躍』であり、『一人では感じられないこと』ではないかと考えた。
またそこから、他の存在やつながりについて考えてみた。

「わかるということ」について考える際、まず「わからないということ」について考えてみた。「わから
ないということ」は、思考が同じ道を行ったり来たりしている状態、まるで思考が迷路に迷っているよ
うな状態を指すのだと思う。それがわかるという状態になる、ということは、思考が迷路から抜け出すこと。
つまり『思考の飛躍』が起これば、問題の答えに辿り着く＝「わかるということ」となるのではない
だろうか。

続いて「わかるということ」を『一人では感じられないこと』としたのは、自分自身何かわから
ない時というのは、たいてい世間一般的な答えや、他人との答えが異なっており、なぜそうなる
のか、そうするにはどうすればいいのか、などと考えている時だと思ったからだ。A という
答えを誰かが持っているからこそ、自分が持つ B という答えや、C という答えから A
に辿り着くことができる。また A の答えを踏まえて、D という新たな答えを導きだすこと
ができる。A という答えを持つ人に尋ねてわかることもあるだろう。つまり「わかる
ということ」は、一人で解決した、わかったと思っても、どこかで必ず他とのつながり
があり、影響を受けるものだと思ったので、『一人では感じられないこと』としたのだ。

日本人は欧米人などに比べ、基本的に消極的で、空気を読むということを無意識に行う人種である。
私がこのエッセイを書くにあたり、少しばかり「わかるということ」が「わかりあう
ということ」と同義であればいいな…と考えていたので、日本人の特性である、空
気を読むということを、『察する』に置き換えることが出来るのであれば、日本人
は人の気持ちを察して、「わかるということ」＝「わかりあうということ」がより自然
に、より大勢と出来るのではないだろうかと思った。そのように考えてみると「わか
るということ」にぐっと温かみが増したような、また同時に、他とのつながりが見えた
ような気がした。

「わかる」という言葉を辞書で調べてみると、【分かる・判る・解る・別る】の四種の
文字で表され、意味は【別々になる・事の筋道がはっきりする・了解される・合点がゆく・理
解できる・明らかになる・世情に通じて頑固なことを言わない】と多数存在する
ことがわかった。意味が多数あるということは、解釈の仕方

も人それぞれだということ。
金子みすゞが残した〔みんなちがって、みんないい〕ではないが、このエッセイ
において「わかるということ」の解釈が多数存在するからこそ、逆に一つ一つが光
ったり、他の解釈に共感したり、反論したり、そしてまた新たに「わかる
ということ」について考えてみたり…、と思考の範囲をどんどん広げることが
出来るのではないだろうか。そして、上にも書いたが「わかるということ」が『一
人では感じられないこと』ということに気が付き、改めて他の大切さを実感する
ことが出来るかもしれない。

□仕事というものは、楽しいと充実感を感じる時もあれば、理不尽な思いをして辛
い思いをする時もあります。私は大学に入り、アルバイト経験をして、様々な事
を感じましたが、改めて強く感じた事は、「いつでも誰かが見えないところ
で働いている」という事です。私のアルバイト先は、朝は 7 時から、そして夜は
10 時過ぎまで営業しています。私は学生ですので、放課後から夜の 11 時
過ぎまで働きます。仕事を終えて駅の改札口を通る時、自宅の最寄り駅を出
て、オレンジ色に点灯する吉野家の看板をみる時に思うのです、「今でも
こうして働いている人がいるのだ」と。そして翌日の朝、目覚めて 7 時を指
す目覚まし時計が目映り、その時働いているであろう、同僚の事を思うのです。

父は私たち家族を支えるために働いてくれています。高校時代までは、父に様
々なものを与えてもらった事をする事を、当たり前のように感じていました。
けれどもいざ、自分も働くことを経験して、仕事をし、そしてお金を稼ぐ事
がどれ程大変なことが初めてわかり、また、これまでしてもらっていた事が、
どれ程ありがたい事なのか気づいたのです。近頃私は、物事に対して何か「わか
った」と感じると、次に「感謝」や「謝罪」の念を抱くことが多いように感じ
ます。高校生まで、私が「わかった」と感じる物事の対象は専ら学問の分野
にあったように思います。高校と大学を境に、私のなかで“わかる”の使
い方が変わったように思えます。“働く”というのは、所得を得ることを目的
としたものに限定されることではありません。私たちが普段何気なく活動
しているこのゼミ活動においても、影の見えないところで事前準備などをして、
働いてくれている人々がいいます。頭ではわかっています。けれども、おそ
らく本当に理解はできていないのだと思うのです。

私が所属しているサークルは、今年の夏に代替わりがあり、私達の代が運
営を担うこととなりました。私

はあらゆるイベントを企画し、運営する役員に就きました。同期もそれぞれ様々な役員に就きました。私のサークルは広告を制作する期間と、イベントを楽しむ期間とがほぼ交互にあり、いつでも何かしらのイベントがあります。私たちがお楽しみ企画を計画している間に、一方で制作チームの役員が、制作の先陣を切って活動しています。他にも常にサークルのために動いていてくれる人々がいます。ここでもやはり思うのです「いつでも誰かが働いているのだ」と。同期が、友人達がそういった仕事を知らぬ間に果たしていると思うと、ここでの思いはさらに強いものとなります。

サークルの場合は、こういった仕事を先輩方が私達後輩のために果たしてくれていたのだ、というのが運営の代として活動しているうちに身をもってわかり、感謝と、その事をしっかりと認識していなかった事に対する申し訳ない思いでいっぱいになりました。先輩方にたくさんの感謝の気持ちを伝えてきたつもりでしたが、上記のことを実感して以降口にする言葉には、重みが増したように思えました。

「ありがとう」や、「感謝しています」などという言葉は、上辺ではいくらでも口にする事ができます。本当に感謝していると口にする物事を理解せずに、口にする感謝の気持ちほど、心のこもらないものはないでしょう。私はいつでも何か気持ちを口にするときは、しっかりと心を付随させていたいのです。アルバイトで体験し感じたもの、サークル活動で体験し感じたものなど、実際に体験して初めてわかること、そしてそこから抱く感情は非常に大きなものです。私にとって“わかる”ということは、そういったあらゆる感情伝達手段に心を付随させるために必要なものであります。だから私は“わかる”ことに対して貪欲でありたいのです。様々な事を経験して、そこから気づく事、それらを大切にしていきたいのです。

□「わかる」ということについて二つのことを感じた。

まず一つ目は、人間の脳の素晴らしさである。理解すること、納得すること。どちらも会話の中で使うと「わかる」となる。でも理解と納得は全く違うものである。理解とは“ことの意味を飲み込む”ことであり、納得とは“ことをなるほどと認める”ことである。さらに、理解は脳でするものであり、納得は心でするものであるだろう。なぜここまで違う「理解」と「納得」を、「わかる」というひとつの言葉で使っているのだろうか。「わかる」という言葉に複数の意味がある。それならば、混乱するだろうと予想する。だが私達は「わかる」という言葉を使うにあたって混乱を起こしたことがない。なぜだろう。それはやはり、人間の脳がよくできているからであろう。「理解」という意味での「わかる」と、「納得」という意味での「わかる」を人間の脳が無意識的に判断しているのだろう。当たり前なことではあるが、人間の脳の素晴らしさを感じた。

そして二つ目は、「わかる」ということの素晴らしさである。私は小学生の頃から数学が1番得意な科目であり、1番好きな科目であった。文型でも数学受験を選んだくらいである。なぜ数学が好きだったか。それはわからない問題がようやくわかったという瞬間がとても嬉しくて楽しかったからである。そしていろんな問題を解いていろんな解法を知っていく。私にとって数学の楽しさは「わかる」ことにあった。そして「わかる」ことについて考えてみて、私は数学と人生が同じものではないかと思った。数学を学ぶ者にとって「わかる」ということが最大の楽しみであるのと同じように、生きていく者にとって「わかる」ということは人生最大の楽しみであるといっても過言ではないだろう。私は人生というものがとても楽しい。「わかる」ことが楽しいからである。生きていけば生きていくほど、いろんなことを疑問に持っては「わかって」いく。そしてこれからも生きていけばいろんなことを疑問に持っては「わかって」いくだろうと思う。それがどんなことなのか予想できず、とても楽しみなのである。数学の楽しさが「わかる」ことにあるように、人生の楽しさも「わかる」ことにあるのだろう。そして「わかる」ということが存在していなかったら、現在の私達は全く別の生き物であっただろう。このことを自覚して生きていく人はとても少ないだろうけど、私はそう思う。更に「わかる」ということには限界がない。この世に存在するもの全てを「わかり」尽くすことはないだろう。だから、どんなに年をとってもまだまだ長生きしたいと願うのだろう。これもまた素晴らしいことだと思った。

今回「わかる」ことについて考えてみて、せっかくこんなによくできた脳を持っている人間に生まれたのだから、「わかる」ということを思いっきり楽しもうと思った。もっと「わかる」という体験をしたいと思った。生きることが楽しくないと嘆く人間もいるが、そういう人は「わかる」ことの楽しさを見失っているのではないだろうか。だから「わかる」ということの素晴らしさを大切にしようと思った。

■自分にとって「わかる」とは何だろうか。普段からあたりまえのように使う言葉だけに、逆に改めて考えると難しいテーマでした。自分なりの「わかる」の意味。そしてその「わかる」を自分にどう関連させていくかを考えてみました。

きっと普段使っている「わかる」というのは本当の「わかる」ではないのではないかと思います。自分のバイ

トである塾講師をしていると「わかる」の違いが何となくですが分かっていきました。授業で解説している時、生徒は納得しています。その場で確認として問題を解かせてもそれなりにはできます。生徒本人も手ごたえがあるようなのですが、でもそれは本当には「わかって」はいないのです。それはあくまで「知った」だけ。この「知った」というのが、普段使う「わかる」の中身なのだとは自分は考えます。その場の授業では分かったつもりで生徒達は、大体は宿題ができません。授業で得た知識を自分のものとしていないのです。だから分かるのではなく「知った」だけなのです。この事は生徒だけではなく自分たち講師にも大きく関係があります。自分は英語、社会、国語を主に教えています。解答だけを話すのではなく、テキストにある知識を講師が噛み砕き、生徒に分かりやすく説明しなくてはなりません。自分が持つ知識を生徒に伝えるというのは想像以上に大変です。「なんでこんなこともわからないんだ！」とイライラもしました。講師にとっての「わかる」とはテキストの内容を知り、それを自分のツールとして再構成することだと考えています。これらのことから本当の「わかる」というのは、知識を得たところで満足するのではなく、自分の中で改めてその知識を作り直せる事なのではないのでしょうか？その「わかる」の確認手段がテストや、練習問題なのだと思います。

今話した通り、「わかる」を目指すとするならテストや問題を解くのが一番の手段でしょう。英単語を見ただけでは実際にテストでは書けないことも良くあります。今受けている大学の授業のほとんどにテストがあるため、「わかる」に近づくことができます。しかしこれからはテストが無い状況も多くなるはずで、今の佐藤ゼミでも多くの知識を得ることになるでしょう。社会人になったら知識の確認のためのテストなんて無いでしょう。それではこれらの状況の中で、知識を得ただけで終わらないで「わかる」ためにはどうすればいいのでしょうか。自分としての大切な手段として「文章の要約」が効果的なのだと考えます。その最たる例が佐藤ゼミでも行われていた「プレゼンテーション」です。プレゼンのために膨大な知識を得ることになるでしょう。しかし書籍の文章をそのまま読んで決してよいプレゼンテーションにはならないはずで、プレゼンとは人に伝えるものです。それなのに自分でも理解できていない内容をどうしたら相手に伝えられるのでしょうか。情報を知り、要約することによって自分なりに理解し、取り込むことができるはずで、

今は情報化社会です。書籍はもちろんインターネット等から簡単に、豊富に情報を得ることができます。しかし情報に溺れるだけで満足してしまうのではなく、自分なりに考えて情報の取舍選択を行い、その上で要約等を通じて知識を自分のものにしていく。これが自分にとってのこれからの情報への理想的な取り組み方であり、1ランク上の自分になるための必要不可欠な事ではないかと考えています。

■私の中で「わかる」ということ言葉は、当たり前のように普段使っている言葉であって、物事を認識することが出来るということである。人が言っていることを認識したり、ある状況を把握したりすることなどである。ただ、「わかる」ということと、似た意味で使われている「理解する」という言葉が別にある。ある人から、「わかる」と「理解する」というのは違う意味であると言われたことがあった。その人が話していたのは、「わかる」というのは自分の中だけで、「理解する」というのは他者が関係してくると。それは、どういう意味かという、「わかる」といのは、このエッセイの最初にも書いたように、人が言っていることを認識したり、ある状況を把握したりすることなどの、自分の中だけでわかっているということである。一方、「理解する」というのは、人が言っていることを認識し、ある状況を把握したうえで、そのことを他の誰かに正しく伝えることが出来ることである。

このことをはじめて言われたのが、中学生のときでした。それまで、当たり前のように使っていた言葉だったので余計に、考えさせられました。もちろん、日本語の正しい意味では、そのような明確な違いはないのかもしれませんが、けれど、その話を聞いてから、少しずつ、自分だけでわかっているのか、他者にも正しく伝えられるのかという事を、意識するようになりました。そのことによって、自分の中ではわかったと思ったことが、実は、わかったつもりになっていただけ、という時に気づきやすくなりました。また、前回の「伝える難しさ」の中で書いた内容で書いた事にも繋がりました。相手が正しく、自分の伝えていることをわかってきているのか、それを聞いた相手が、また別の人に伝えるときに正しく伝えられるように、意識するようになってきました。

まとめとして、「わかる」ということで満足するのではなく「理解する」を目指すことが大切。私にとって、「わかる」といことは、わかったからそれでいいのではなく、「納得してはいけない段階」である、ということです。

■わかるということ「共感する」という意味に絞って考えを述べていこうと思います。「わかる」という言葉は会話文でよくできてきます。例えば、(自分の辛い過去を投影して中島みゆきの歌詞の話をしている女の子。その話を聞いている友達の言葉→)「あ、それわかるわあ〜」この、「わかる」に関して言えば、友達の理

解度はどの程度なのか、まったく言及されていません。過去に自身も辛い目にあって、同じ中島みゆきの歌で泣いた経験があれば、80パーセント程度はその子の言っていることが「わかって」います。かたや、中島みゆきの歌は知らないけど、たぶんそんな内容の歌で、じ〜んときたんでしょ。という程度であれば、そのパーセンテージはせいぜい7ぐらいなのでしょう。

「わかる」という言葉は時として残酷です。理解度の深さに関係なく、この言葉1つで「共感しているよ」という甘い思いを相手に巧妙に伝えてしまうからです。もうほとんどペテン。…別に私が過去にこの言葉で痛い目を見ているわけではないのですけれども。

残酷な使い方があるのならば、その逆の使い方もあります。それは理解度を上げるということなのですが、理解度を100にすることは不可能です。理解度が100ということは、相手と同化することだからです。そのためには相手とまったく同じ経験と遺伝子が必要となってしまいます。

「わかる」の心温まる使い方は、相手の言っていることに対して理解度が悲しいほど低いのであれば、1パーセントでも上げる働きかけをしてから、(ちょっとは)「わかったよ」と言うことなのかなと思います。僕も母親との会話が殺伐としたものになりがちだったのですけれど、母親がティーンネイジャーの時に好きだったザ・タイガース(とりわけジュリー)の楽曲を聴きだしてからというものの、関係が友達レベルにまで上昇しました。親から電話がかかってくると「モナリザの微笑み」のメロディーが流れます。

相手と共感できるということほど心地の良いものは他になかなか思い浮かびません。その心地良さゆえ、「わかる」という言葉が会話文の中で多用されるのではないのでしょうか。しかし、その心地良さを得たいがために相手に「わからせる」のは非常に危険だと思います。何としてでも相手を変えてやろうと力を入れてしまうと良い関係はだいたい築けません。部活やサークルの勧誘も、やりすぎは良くないですね。だいたい最初の飲み会だけ参加されて、あとはドロ。獲得できるのは部員じゃなくて飲み代の請求書。

人も和音も、共鳴している状態が一番心地よい。

■エッセイの課題が与えられた。テーマは「わかるということ」。これを聞いたときにわかるということとは一体何を対象としているのだろうかという疑問を抱いた。普段私達がわかろうとする対象はなんだろうか。それは自分以外のもの、つまり他者ではないか。相手の考えや感情を理解しようとするのである。確かに他者を理解しようとするのは非常に重要なことだと思う。就職活動をしている先輩方の話を聞いても社会からはコミュニケーション能力が求められていることが伺える。社会に出れば必須と言える程に他者を理解することは重要となっている。

しかし、このように叫ばれる中で自分自身を理解するということがあまり重要視されていない気がする。就職活動でも自己分析、自己分析とあたふたしているといった印象を私は持っている。私達は自分自身のことをどれくらいわかっているのだろうか。個人的な話だが少なくとも私は自分のことを知りきれてはいない。自分がどういう人間なのかははっきりとはわからない。好きなことで自分をどういった人間であるかを語ることは容易にできると思われるが、とりわけ性格がどうであるかを語るのは難しいのではないか。仮に何らかの書類に自分の性格を記入する欄があってもすんなりと私は書けない。事実、こういった事態に直面する人がほとんどだと思う。これが自分自身のことをわかっていないという現象面だ。しかし、私は少しでも自分を知る手段としてこんなことを思い出した。

私は以前自己PRをする機会があった。自分はこういったことがあまり得意ではなく、今と比べると物事の考え方も幼かったため、自己分析などしたこともなかった。そこで、自分なりに自分がどういった人間であるかを考えた上で数人の友人に聞いたことがある。多少なりとも共通した部分はあった。しかし、考えもしなかった答えが返ってきたという経験をしたことがある。自分の見解に主観的な要素があったため、友人との認識のズレは当然と言えば当然の結果であろう。確かに主観的よりも客観的なものの見方が説得力はある。当時、友人に指摘された自分はわが身を振り返ってもそうと自覚できなかった。しかし、それは意識することのなかった自分が存在することを意味し、それは間違いなく自分自身なのだ。つまり、客観的に見るということが自分を知る手段のひとつではないだろうか。また、先に述べたが他者を理解することも自分を知る手段の一つかもしれない。あの人はこういう人だと知ることができれば自分と比較し、相対的にだが自分はこういう人間なのだと認識することができよう。つまり、社会的比較を行うということである。

自分を知る、理解するということは他者に理解してもらい、他者を理解するということによってわかるものではないだろうか。このような見解をこのエッセイを通じて得られた。先にも述べたが自分はまだ自分のことをよくわかっていない。自分という人間を知るためにまず他者のことを理解するよう努めたい。

■「わかる」という言葉はとても奥が深い言葉であると思う。「わかる」とは何なのか?突き詰めていくとす

ごく哲学的な話になって、答えを見つけるのがとても困難な気がする。自分が思うに、「わかる」ということはある種の感動を覚える事だと思う。多くの人が「わかる」という言葉をきいて想像するのは、勉強に関する事だと思うが、学校の勉強や受験勉強など「わかる」ということ無しに話は進まない。「わかる」と「覚える」ということは、一見同じ事ように思えるがちがうと思う。「覚える」ということは掛け算の九九を覚えたり、歴史の年号を覚えたりすることで、単純作業の繰り返しであり思考をあまり必要としない行為であるとおもう。いってみれば「覚える」ことは人間以外の動物にもできることだと思う。動物は物事を繰り返し行うことで「学習」し、「覚える」ことができると思う。一方、「わかる」という行為は動物にはできなく、人間にできる特権みたいなものだと思う。「わかる」ということは「覚える」ということの一段上の行動であり、おぼえた物事を頭の中で理解し理論づける行為である。

上で「わかる」ということはある種の感動を覚えることだと思うと書いたが、この事を象徴するのがアハ体験というものである。この言葉は有名な脳科学者の茂木健一郎氏が紹介しているが彼曰く、アハ体験とは「あっ、そっか！」とひらめくことであり、例をあげるとニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見したエピソードがそうであると言っている。ニュートンに限らず、人は日常生活で多くのアハ体験をしている。例えばわからなかった数学の問題が解けたとき、例えば長年の疑問が解けた瞬間の「ああ、そうか！」というひらめき体験である。この瞬間、脳には大量のドーパミンが放出され脳に刺激と快感をもたらすという。この刺激と快感が人間が物事を「わかろう」と努力する原因ではないのだろうか？自分も数学の問題や社会の問題などが解けると嬉しいし、また解いてやろうという気になる。これは問題を解くことで感動を覚えたいという気持ちの表れなのだと思う。

こうやって考えてみると、「わかる」ということは自発的な行為であると思う。誰かに指図されても「わからないまま」なのであって自分から積極的にわかりにいかないとこのようなひらめきや感動は得られないのである。しかし、誰かの考えをもとに「ああ、そうなのか！」とわかることもできると思う。自分が思うに、大学生活という場は多くの「わかる」が得られる場であると思う。これはゼミ活動にもいえ、自分からわかろうとすれば多くの「わかる」ということが経験できると思うし、他の人の考えや意見を参考にまた「わかる」ことができるのではないかと思う。大学での勉強には答えのない「わからない」も多いかもしれないが、自分なりに一つでも多く「わかる」感動を味わいたいし、誰かの「わかるということ」を手助けできればなあと思う。

■わかるということ、それは、面白くて、嬉しくて、楽しくて、悲しくて、つまらなくて、驚いて・・・。
何かを「わかる」ことによって、私達は様々な感情を抱く。人は生まれながらに、何かを「わかろう」としている。しかし、「わかる」ということは難しく、何かを100%「わかる」ことは不可能である。「わかる」ことの限界は認めるけれど、でも、やっぱり、何かを「わかろう」としている自分がいて、日々「わかりたい」対象物を追い求めている。人は、「わかろう」としなくなった時、一つの終焉を迎えるのかもしれない。

では、「わかる」ということは、どういうことなのだろうか？私の導き出した答えは、未知のことを自分の脳内の筆筒の引き出しに分類して納めることができる、ということである。どの引き出しに納めていいのか決められない、あるいは納めるべき引き出しが見当たらないものは「わからない」のである。自分の内に筋の通った体系があって、未知のことがその体系にピタッと納まるということ、それが「わかる」ということなのである。その意味では、「わかる」と「分ける」は同義なのかもしれない。ただし、一口に「わかる」といっても、その持つ意味合いは時間的経過や心身の成長によって異なるであろう。つまり、「わかる」にはいくつかの段階があるのである。

私達は、個々のことがらを「知る」ことから「わかる」ことを開始する。英語で言えば know である。すなわち、「知っている」ということは、「わかる」ための必要条件であり、第一段階でもある。「わかる」ことの最初の段階は、日常生活の中である種氾濫している情報を「知る」ことから始まり、これは情理解と規定できる。

「わかる」ことは、次に、一定のまとまりのある事柄の全体像を「わかる」段階に発展する。つまり、複雑なことがらを一旦分解し、再構成して全体像が「わかる」ということである。この段階になって初めて、「わかる」に「分かる」や「解る」といった漢字を充てることができる。英語では understand にあたり、概念的理解と規定できる。概念的理解とは、個々の情報・知識を総合的・構成的に理解することである。また、一つの情報を知識として「知る」に止まらず、そこから自らの課題を生み出す可能性を持った理解でもある。概念的理解の中には、「他者理解」なるものが含まれている。他者理解について考える際に、understand という言葉の意味を考えてみる。stand には、bear や tolerate と同じく「我慢する」という意味がある。他者を理解するということは、様々な我慢 (stand) の下 (under) に成立しているのかもしれない。自分とは違う他人を受け入れる(理解する)ためには、ある種の自我を押し殺して我慢することが必要、ということなのだろう。

最後に私達は実践的理解にたどり着く。実践的理解は、過去に蓄積してきた「わかる」から何かしらを創出することができる理解である。これが「わかる」のいわば最終段階であり、私達はこの段階を目指すべきなのである。与えられた情報を鵜呑みにするだけではなく、それを理解し、そこから新たな何かを「わからう」とすること、すなわち、「わかる」の段階を自覚的に発展させていくことが、私達に求められているのではないだろうか。

■現代の日本の若者には学習意欲がないと世間で言われている。「好きこそ物の上手なれ」ということわざもあるように、現在若者の学力が低下していることは単に制度のためだけではなく、以前の日本人が当たり前のようだった学習意欲が失われつつあることも原因として挙げられるのではないだろうか。

『学習』を「わからないことをわかるようにすること」と定義しよう。なぜ現代の日本人の学習意欲が低下してしまったのかを考える上で、この定義が大変重要になると私は考える。その私なりの答えは、今の若者は「わからないことを、すでにわかりきっていると錯覚しているから」である。その錯覚は近代文明が作り出した数々の機器が原因であると考えられる。例を挙げると、学校で出された課題も情報サイトからコピーをし、プリントアウトすれば済むようになった。(大学では厳しいが…) また、わからない言葉もインターネット等ですぐに検索できるようになった。次に携帯電話を例に出そう。私たちは携帯電話の普及によって離れた場所にいる人とコミュニケーションが取れるようになった。しかしメールという顔を見ない文字だけのやりとりは、知らずに相手のことをわかった気にさせることがある。(「嬉しい」と書いてあれば相手は喜んで、など)

かくいう私もある程度のことはわかっている気であるし、わからなくても何らかのルートでただちにわかる状態まで至れるとつい錯覚してしまっている。しかし、それらは「物事の本質を理解していない。」のである。『1+1がなぜ2になるのか?』このような命題に対しても完全な説明が出来る＝わかっている人はきわめて少ないのではと思う。だからこそ私たち人類は途方もない長い年月をかけて様々なことを学んできたのだと思う。

私は、今の若者は「わからないということ」を軽視しすぎだと考える。本質を知ろうとせず、うわべだけの薄っぺらな知識では社会に出てなんの役にも立たないと思う。多少話はそれるが、グローバリズムが叫ばれている世の中で重要なのは英語を話せることではなく、国籍・文化・人種の違う相手の意思を尊重しわかってあげることだとも私は思う。このように形は違えど、「わかるということ」の大切さをもっと考えていかないといけないのである。

□「わかる」という言葉は変換してみると「分かる」「判る」「解る」が出てきました。今回は理解をするという意味での解るについて考えてみました。私は算数・数学が好きでした。特に計算が好きでした。答えが正解することに気持ちいい感情すら覚えていました。何分もかけて解いた計算が1つの決まった答えに合致するのが嬉しかったのだと思います。ただそれは数学に限っての話で、世の中には「解る」と、いうものの答えは物事に対して1つではありません。形のないものにも考えても、考えても答えがでないものもあります。よく人は「解った?」などという言葉を使いますが、解るということは、一体良いことなのでしょうか? 良くない事なのでしょうか?

一般的にはわかるということは“良いこと”とされているようです。というのは1つ1つを考えてみればわかることです。数学、友達の気持ちを解る、立場を解る…など、解って損をすることは無いと思います。立場を解るというのは特に自分自身を再確認するという点ではものすごくいいように思います。最近では“空気を読め”を「KY」というのが流行っています。読むというのは理解するという意味と一緒に意味だとすると、空気を理解するのは良いことだということになります。しかし私の中にはなにかひっかかります。解るというのは答えをだすプロセスなのです。答えを出してしまうプロセスなのです。世の中には考えても答えがでないものがあるといいました。答えがでないならばわかるはずありません。

解るということの悪い点は「限定」してしまうという点です。人は考え、理解し、わかってしまうと考えることを辞めてしまいます。それが一番怖いのは、形の無いもの解るということです。例えば自分自身。大学生にもなれば自分がどのような人間であるかが少しはわかるでしょう。しかし自分では気づいてない部分も多いはずで、「～ちゃんって変わっているよね」などと友達から意外な言葉を言われたことのある人も多いでしょう。自分自身を解ったつもりになり、自分というものを限定してしまふのです。続いて自分自身以外の人です。人の気持ちを安易に「解る」としてしまふと自分以外の人にもまた限定してしまうことになってしまいます。ただ、その解ったことが間違っていたことだとしても、直すことは出来るので心配はいりません。自身においては、自分自身に問いただしたり、友達と交流をして新しい自分を発見できる、といったこともで

きます。自信以外に関しては、友人とふれあい事で新たな一面を発見することもあるでしょう。

「わかるということ」＝「○○○」と考えたとき、イコールと出来るものは私の中で出てきませんでした。わかるということは良い事であって、時には良くない事にもなります。限定してしまうことが良くないので、物事に対して余裕をもって「解る」ことをしたほうがいいのではと思いました。イメージでは5分の3解った、というように。わかることに頑固になりすぎないのが一番いいと感じました。

□このテーマから、私はふたつのことを考えた。ひとつは、日本語の言葉の持つ奥の深さ。もうひとつは、コミュニケーションをとる上で「わかる」ということの大切さである。

日頃から頻繁に使う「わかる」という言葉。普段何気なく使っているけれど、考えてみると「わかる」ということには様々な意味合いがある。まず深さでの意味合いの差異。たとえば、表面的にとりあえず相手の言葉や、書かれていることが「わかる」。また、その言葉や文章を発信した意図、心情まで「わかる」。それから、その本質までもが「わかる」。など、様々な深さで段階がある。さらに、幅での差異。たとえば、「わかる」という行為が自己完結しているものなのか、対象にも影響をあたえているのか、など。このように「わかる」ということひとつには、様々な意味がある。どれが本当の「わかる」ということではなく、おそらく全部「わかる」なのだが、そのひとつひとつをその場の雰囲気や置かれた立場で臨機応変に感じ取り、瞬時に様々な「わかる」行為をしている。これは次に述べるコミュニケーションにもつながる事だが、日本語独特の曖昧さを残した、言葉の奥の深さなのだと思う。この曖昧さはよくも悪くもある。けれど、そのよさや悪さをうまく使いこなし、うまく「わかる」行為をしていくべきなのだろう。言葉の奥の深さを改めて考えさせられた。

また、コミュニケーションをとる上で、この「わかる」ということは非常に重要なものであると考える。なぜなら「わかる」をどこまでわかればいいのか、という判断で色んなことが変わってくるからだ。それは特に、目に見えない大切なもの、たとえば信頼とか友情、恋愛関係とか人と人を結ぶものを守るためには非常に考えなければならないものだろう。伝える側とわかる側にギャップがあってはその大切なものは保たれるとは思えない。そのコミュニケーションで重要な「どこまでわかろうとするか」は、わからせる側よりも、わかろうとする側の心構えのようなものに重きが置かれると考える。たとえば恋愛。相手の言葉、表面的にはわかるけど、その裏にはなんかあるんじゃないの～なんて、やたら深いところまでわかろうとする。それはきつと、対象をわかりたいからで、わかることで目に見えない大切なものを見つけようとし、求めているかただろう。それは講義や仕事もまた然り。同じ伝え方でも、わかる側が知りたい、わかりたいと思わなければ本質は伝わりにくい。ところで、「わかる」ということ「伝える」ということは両極にあると思う。伝えられたことを「わかる」というキャッチボールは、コミュニケーションには不可欠なのではないだろうか。このキャッチボールができない故に、世の中ではおかしなことも起きている。なおさら、コミュニケーションにおける「わかる」ということの重要性を感じる。

以上から、私は日本語の言葉の持つ奥の深さ、また、コミュニケーションをとる上で「わかる」ということの大切さを改めて考えた。

□中学校の社会の時間に人間は最低限の衣・食・住の環境があれば生きていけると習ったことをふと思い出した。服を着ていなければ、捕まってしまう。食べ物がないければ、飢えで死んでしまう。住む家がないければ、睡眠を十分にとることができない。この3つの要素は、生きていく上で、生活していく上で、欠かせない重要な要素なのだ。中学生だった私は当時「これはきつと『人間が生きていくうえで欠かせない要素をなんといいですか？漢字三文字で答えなさい。』という問題として出るだろうな。しっかり覚えておこう。衣・食・住！」という具合にしか考えていなかったと思う。今回はその衣・食・住に絡めて、私の“わかるということ”エッセイを書くことにする。

幼少時代のアルバムを開くと、そこにはかわいいうさぎさんの前掛けをした自分がいた。一緒に写っているのは、その前掛けを作ってくれた祖母だった。祖母は私の前掛け・水着・帽子と色々なものを作って着せてくれた。写真の中の私は、満面の笑みでその服を着ている。祖母も喜んで見守ってくれている。

母の料理は美味しい。特に和食料理では、必ず自分で出汁をとって、時間をかけて料理を作る。私が大学生になった今でも、早起きをして、一からお弁当を作ってくれる。お弁当に“市販の冷凍食品を使わない”ということが主婦人生の自慢だそう。彼女が守ってきたものは、まさに“おふくろの味”なのだ。私は20年間“おふくろの味”で育ってきたと言える。

父はいつも夜遅くに帰る。晩御飯はなるべく家族揃って食べるというのが池谷家家訓となっているが、それが無理なときも度々ある。週末「お父さん、久しぶり！」なんて会話もある。しかし、そんな父は家族の

ために沢山働いてくれているのだ。だから、私は今家族六人が快適に過ごせるこの家に住むことができる。

衣・食・住どれも欠けていない。今まで当たり前と思っていたが、こうして考えてみると、私の衣・食・住は、大変充実したもので、ありがたいものだということが20年間と8ヶ月経って初めてわかった。しかし、これでは「お父さん、お母さん、私のためにたくさんのことをしてくれてありがとう。」これでは、結婚式の両親への感動の手紙みたいだ。私にとって、そのことが100%“わかるということ”にはなっていないと思う。

将来、私は大学を卒業し、社会人となり、働き、結婚して、子どもを生んで自分の家庭を持つだろう（…多分）。私は家族のために、出来るだけ良い衣・食・住の環境を用意したいと思うであろう。しかし、私は、それらの物質的な要素のみにとらわれるのではなく、その背景となる大切なものを伝えたいのだ。それは、私の両親がやってくれたことを、自分も子どもにかえしてあげるということだ。自分の親がやってくれたことは、自分にとって大切な財産である。そして、その財産を子どもにも伝えて残していくこと。私は成人を機にそう考えた。そして、それが私にとって“わかるということ”の完成版になるのだと思う。

■僕はこの課題が与えられた12月6日のオリエンテーションで、このテーマが出されたとき「なんて抽象的なテーマだろう、結論なんか出るのか。先生はなぜこのテーマを書かせたいのだろうか。」というのが正直な感想だった。そしてそれから3週間、僕はまず先生がなぜこの課題を出したのか、それを考えてきた。幾度となく先生に質問してみようかと思ったが、過程や結論のヒントを頂いては面白くないと思い、とにかく考えた。そして今日(28日)やっと自分のなかで結論が出た。それはこのテーマには幾多の結論があり、幾多の過程がある。そしてどれも正しいということ。更にオリエンテーションからも分かるように、先生は今「言葉」というものに興味を抱いていらっしゃる。そしてこのテーマから「言葉」ということもテーマなのではないだろうかと思いました。この結論が正しいかどうかはともかく僕としては、そこから「わかるということ」の課題だった。

僕は言葉というのは非常に断定的で難しいもだと思う。言葉の「わかる」とは100%分かっている状態でしか使えないからだ。しかし人は「わかる」と言った時、常に100%分かっている状態で使っているわけではないと思う。言葉とは「わかる」にしてもなんでもその言語が100%の達成がなされていなければ不適切で、言語の意味が正しく伝わっていないことになる。そこから言葉とは断定的であることがわかる。しかし言葉とはそれほど厳密なものだろうか。

「わかる」という言葉の意味は「理解する。把握する。合点がいく。」などだが、この言葉を使用するときの用法は見たことがない。100%分かっている「わかる」を使うのか、80%分かっている「わかる」を使うのかは分からない。だが普通に考えて「わかる」は80%で分かるということにはならないだろう。特に「理解する」や「把握する」などは100%理解、把握していなければ意味と違いが生じるだろう。しかしそこで使われるのが副詞である。副詞とは便利なもので「だいたい」や「半分」などを使うことでどの程度「わかる」が出来ているのかが分かる。ここで面白いことが考えられる。「わかる」をより正確に分かりやすく表現するために作られた補足的役割の副詞が、動詞を格下げしてしまったのだ。副詞は動詞あって初めて生きる。動詞は副詞が生まれるまで単独で存在できた。しかし副詞が現れたことで動詞も副詞なしでは正確に表現出来なくなってしまった。皮肉である。

ここからは「わかる」という言葉について考えてみたい。「わかる」という言葉は、普通に考えて「理解する」「把握する」と意味は同じだ。なぜ一つにまとめないのだろうか。分かれていることにはなにか意味があると思えば、考えてみると、「わかる」というのは広い範囲を網羅できる動詞で、ある意味なくてもやっていける単語でもあった。「理解する」「把握する」はニュアンスが近く事柄や地図などを理解、把握するときには最適である。当然「わかる」も使える。しかし漢字から考えると「わかる」はよく分からず、「理解する」は理を解する、計算や理論など一見わからない事を解いて分かるようにすることで、「把握する」は地図や図面など現状の状態を握る、つまり掌握するみたいなことである。ここからもニュアンスの違いがわかる。だが「わかる」は漢字からも分からない。このことから「わかる」は日本で生まれた言葉で、口語という可能性が出てくる。更にお気づきかもしれないがこの上の文章で「理解する」「把握する」という言葉を説明するとき、「わかる」という言葉を多用している。そこから実は「わかる」はオールマイティな言葉でも「あるということ」だ。

今回このテーマにあたって僕は再度言語についていろいろ考えてみた。「わかる」一つをとってもいろいろと発見ができ、楽しめた。そして「言葉」の難しさも感じこれからのプレゼン、スピーチに生かしていきたいと思いました。

□わかる【分(か)る・解る・判る】

- 1 意味や区別などがはっきりする。理解する。了解する。「物のよしあしが一・る」「言わんとすることはよく一・る」「訳が一・らない」
- 2 事実などがはっきりする。判明する。「身元が一・る」「答えが一・る」「持ち主の一・らない荷物」
- 3 物わかりがよく、人情・世情に通じる。「話の一・る人」
- 4 一つ一つのものが別々になる。わかれる。

(『大辞泉』より抜粋)

今年で21歳になった。もうかれこれ義務教育と合わせると約14年勉強してきたことになる。14年も勉強してきたのに、「わたしは一体なにを学んできたのだろうか」と悩むことがある。勉強は決して好きではなかった。しかしいつも思うことは、わたしは「恵まれている」ということ。きちんとわたしのためだけに机が用意され、色鮮やかなペンまで揃えられている。家に帰れば暖かいご飯とお布団が待っている。世界には満身に勉強を受けられなかった同世代も多くいただろう。こうやってパソコンを所有し、使いこなせる学生はほんの一握りだと何かの本で読んだことがある。その一握りの中に、わたしは入っている。本当に、いつも思う。わたしは恵まれている。

この「恵まれている」立場から何を生み出していけばいいか。無駄にはしたくない、と思う。無駄に学生生活を過ごしても、それはそれで楽だろう。しかしそれは私にとって「得」か。もっと刺激なるものが欲しい。そして、「新しい自分」を生み出したい。

そこで、今目標としていることがある。「客観的に物事を『分かる』、『理解する』自分」である。決して熱くなくてはならない。冷静に見つめ理解し、判断する。それはどこでも求められている人材ではないだろうか。世界規模でも言えることである。そのためにも、もっとゼミや、他の場でいろんなことを勉強していかなければならない。こんな風に思えるようになったのも、ゼミに入ってからである。こんなに人と何かを話し合ったのはゼミに入って初めてかもしれない。また、こんなにも自分の意見を言えるようになったのも初めてかもしれない。ゼミに入って、本当にいろいろな人と出会った。ゼミの仲間がいるからこうやって議論し、刺激し合えていけるのである。

ゼミだけではない。大学に入って今までに出会ったことのないような人とたくさん出会ってきた。サークルやバイト、どれも自分にとっては刺激的な体験が多かった。しかし、新しい「出会い」もあれば『別れ』もある。人生はこの繰り返しだと思う。長い引越し生活を続けてきたわたしには本当に分かる。まだわたしにはどんな「出会い」が待っているのだろうか。はたまた『別れ』か。それはだれも『分からない』。

大学生活も半分過ぎてきた。あと残りどうなることか。それは自分次第である。無駄に過ぎないためにも、あらゆる刺激を受け、自分の目標を成し遂げたい。そしたら『わかる』の本当の意味をつかむことが出来るだろうか。自分次第、である。

□数年前に一世を風靡した、養老孟司の「バカの壁」。わかるということを考えるにあたって、この本を思い出した。高校生の時に読んだきりなので細かいところの記憶は曖昧だが、“わかっていると思うな”という小題を覚えている。ある物事に対して「自分はわかっている」「そんなの前から知っている」という意識をもっていると、その物事の本質を捉えようとしなくなる。いくら機会があってもわかろうとしなくなる。本当は、「わかった気がしている」だけなのに。この「わかっている」という意識こそが「バカの壁」なのだという内容だった(当時の私の理解によれば、ですが・・・)。

何事も根本から全てを理解することは不可能である、という前提の下私たちは生きていかなければならないのだ。つい先日、ゼミ連のディベート大会に出席した時、講評で久野教授が「人間は、他人(相手)のことを完全には理解することは出来ない。出来ないのだけれど、その前提を踏まえたうえで、相手のことをわかろうと努力していくものだ」と話していた。なるほど、対人関係においても完全に「わかる」ことは無理なのだ。つまり「わかるということ」の完全な形は存在しないということになる。相手のことを完全にわかることはできない。経済学を完全にわかることはできない。自分自身のことですら完全にわかることはできない。でも人間は本能的にわかろうとする機能が備わっているのだと思う。勉強するし、相手のこともわかろうとする。小学校低学年までくらいの子供と一緒にいると、「なんで？」という質問をよくされる。「なんで鳥は飛ぶの？」とか「なんで学校があるの？」とか、とにかく色々なことを聞いてくる。こういう純粋な「わかろうとする」本能が、学問を発展させ、科学を進歩させ、哲学を生み出してきたのだと思う。

私の中で、わかるということとは「喜び」である。(ここでいう「わかる」は不完全な形での)勉強をして、テストで出された問題がわかったときや、自分の持っている知識と新しい知識が結びついて新しい発見・理解があったときは純粋にうれしくて、楽しい。友達の新しい一面がわかったとき、相手が私のことをわかってくれたときも喜びを感じる。

「わかるということ」は不完全だが、その不完全さを理解した上でより完全に近づこうとする姿勢が大切

であると思う。そして一部でもわかったとき、それは喜びになる。「わかるということ」は不完全だからいいのかもしれない。

■ 「人のすべてはわかりえない」

なぜならば、自分と他者は、共有できるものはあったとしても、育ってきた環境の違い、容姿の違い、趣向の違いから必ず食い違いが生まれるからだ。したがって、共感できることはあっても、それは一部分にすぎず、他者を完全に知ることはできないのである。

以上のことは疑いようの無い真実である。したがって、「他者とはある程度、適度な距離をもって接しましょう」ということが社会の中でうまく生きていくための個人の姿勢である。もし他者が自分のすべてを知ったような口をたたこうものなら「人の全てはわかりえないぞ」と言ってやれば、一蹴である。では、この言葉を日本の現代社会に当てはめてみよう。すると少し形が変わる。

「人はわからない」

つまり「他者にはあまり深くかかわらない」という暗黙のルールが社会生活を送る上で当たり前になっている。なぜならば、高度経済成長期から現在にまで、人口の流動化が進んだからだ。以前は近所付き合いを大切にしている人が多かったが、現在、隣に住んでいる人の名前も知らない人が増えている。

「人はわからない」という思いがまかり通っているため、人を信用することができないのである。そして、小学生が殺人鬼と化す現代では、「家から一歩外に出れば、周りの人は悪人だ」とさえ言われている。

しかし、人は本当にわからないものだろうか。人のすべてはわからないのは確かであるが、人はわからないというのは間違っている。現代では、「人はわからない」のではなく「わかろうとしていない」だけなのである。わかろうと努力すればすべてではなくともお互いにわかる部分があると思う。例えば、朝「おはようございます」とあいさつするだけでもお互いの印象はずいぶん変わる。きっかけがあれば、世間話に発展し、よい近所付き合いができるようになるかもしれない。

最近、安全のために子供に携帯電話をもたせる親が増えてきた。また、携帯電話会社は子供の居場所がすぐわかるサービスを始めたようである。つまり、子供は24時間監視されていることになる。人間が科学を支配するのではなく、科学が人間を支配するというおかしな構図が出来上がってしまった。科学技術の発展によって人々の生活が豊かになることは望ましいことである。しかし、科学では手の行き届かない分野というものがあるのではないか。そうした分野をカバーできるのは人のネットワークだと思う。人のネットワークを広げるためにも、お互いをわかろうとする努力が必要である。
